
さくらのしきさい

マランビジー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

さくらのしきさい

【コード】

N9344S

【作者名】

マランビジー

【あらすじ】

逃亡する男をヤクザ者からかばう佐倉響子の物語。

私とその女と出会ったのは横浜の新山下だった。海を望む大きなクラブには無理な若作りを化粧で誤魔化した女や慣れない化粧で背伸びしたガキどもが集っていた。ズボンの裾を震わせるほどのウーハーが脳天にまで響いていた。何が楽しくてこんな場所に人が集まるのかさっぱりわからなかった。

商売女に手をつけて一緒に逃亡した男を追って私はこの街にやって来た。その頓馬な男が逃げ込んだ先がこの騒々しいクラブだった。女のケツを追っかけているような男を探しだすのは簡単だ。男に簡単に口説かれる女を探すのも同じだった。

「おい、お前自分が何をしたかわかってんだろうな。こっちは客に謝罪のしっぱなしなんだぜ。無事に済むと思つたら大間違いなんだよ」私は店内で踊り狂っていた頓馬を店の外に連れ出した。

「勘弁して下さいよ。長尾さん。本気で惚れちまったんだよ。どうにもならねえじゃねえか」頓馬男は泣きながら謝罪した。

「お前が惚れた女は連れて帰るぜ」私はジャケットのポケットからナイフを取り出してその刃先を頓馬に向けた。頓馬は土下座して何度も頭を下げた。

「お前の事情に興味はねえんだ。命がけの恋で幕を閉じるなんざ、ためえには出来過ぎた人生だぜ」私は殺意をちらつかせた。本気で殺す気はなかった。しかしこの手の輩には恐怖が一番効果的な薬だった。少々痛めつけて死の恐怖に直面すればナメた真似をしなくなることを私は知っていた。

「おい！そのノツポ。物騒なモノを人に向けるな」私の後方から女の声が聞こえた。振り返ると化粧もせずヨレヨレのＴシャツにオーバーオールを身に付けた女が立っていた。

「かずちゃん、大丈夫」その女は頓馬に駆けよると私と頓馬の間に立ち塞がった。

「おい、姉ちゃん、怪我したくなかったらとつと帰りな、とか言うんだろっ！」その女は私のセリフを私が言う前に口にした。私は絶句した。

「弱い者いじめは許さないぞ！」その女は私に向かって言いたいことを言った。

「いい度胸してるじゃねえか」私はナイフを仕舞った。女に刃物を向ける趣味はない。

「かずちゃんは今一生懸命働いているんだぞ。不始末はお金で解決してあげなよ」その女は面白い提案をした。

「いいだろう。証文はいただくぜ」私が言うとその女は頼馬を立ち上がらせて「今から証文作ろうよ」と言いだした。

「だったら静かな場所を教えてくれねえか」私は意識して穏やかに言った。

「いいよ」その女は頼馬を伴って元町に向かつて歩き出した。その女が案内した店は老夫婦が営むカフェだった。客は私たち以外誰もいなかった。

「おばちゃん、コーヒーみつっ」女は勝手に注文をした。

「どんな証文を作るの？」女は私に聞いた。

「その前に金額を決めねえとな」私が言うとその女は「百万！」と言った。

「そんなに払えるのかい？」

「月々五万で二十回払い」女は頼馬の了解も得ずに勝手に話しを進めた。

「そんなに待てねえな」

「だったら十万で十回払い」

「あのなあ、一回で払ってもらいてえんだよ」私が言うと「だったら五十万円」とその女が言った。

「その男がそんな現金持っているのかよ」私が聞くとその女は「明日払うからそれでいいでしょ」と言った。

「本気かよ？」私は半信半疑で聞いた。

「本気だぞ」その女は私を真つ直ぐ見て言った。なかなか肝つ玉の据わった姉ちゃんだ。

「明日さっきのクラブに来てよ。夜の八時なら来れるでしょ」そう言うとその女は頓馬を連れて店を出ていった。女のペースに吞まれて私は三人分のコーヒー代を支払った。

翌日の八時にクラブに足を運ぶとみすばらしいスーツを着た頓馬が待っていた。

「すみません。長尾さん。これで勘弁してください」頓馬は封筒を差し出した。

「ああ、これでいいぜ。もう街には帰って来るなよ」私はそれだけ言うと封筒の中身を見た。五十万千五百円入っていた。前日のコーヒー代も込みだったのだ。私はクラブの駐車場に停めたポルシェに戻った。そこにあの女がいた。

「これってあなたの車？」女は私に聞いた。

「ああ」

「かっこいいね。今描いていたんだ」女は前日同様の冴えない恰好をしていた。

「こいつを描いたのかい？」私はその女に聞いた。女はスケッチブックに描いたポルシェを見せた。

「おい、この車はこんな色じゃねえぜ」私は女に言った。

「この色がいいんだよ。おじさんに黒は似合わないよ」

「おじさんじゃねえ」

「何さん？」

「長尾だ」

「長尾さんにはこの色が似合うよ！」その女は描いた絵を私に差し出した。

「あげるよ。かずちゃんを許してくれてありがとう。お礼だよ」女が言った。

「この金はお前がいつに貸したんだろう」私は頓馬から受け取った封筒を見せて女に聞いた。

「インドに行くのがちよつと遅くなるかな」女は海を見ていた。

「夜の海は照明を反射するのに同じ形のままではいないんだよね。描きづらいな」女は独り言を言った。

「海が好きなのか？」

「海は青空の下がいいよね。南太平洋が見たいなあ」

「インドじゃインド洋しか見えねえぜ」

「でもインドには大きな川があるからね。見た事がない色だよ」女の笑顔が弾けた。

「どんな色なんだい？」

「見ないとわからないなあ」

「なんでポルシェをこの色にしたんだ？」

「似合うでしょ、この色。さくらいろ」

「女々しいぜ」

「そんなことないよ。帰ったら塗り直してネ」

「気が向いたらな」

「お前、名前なんていうんだ？」

「さくら、佐倉響子！」女は私に手を振ると走り去って行った。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9344s/>

さくらのしきさい

2011年5月3日00時40分発行